

書 評：鶴来航介. 2023. 木材がつなぐ弥生社会—木工技術論の再構築. A5 版, 544 pp. ISBN978-4-8140-0458-4. 京都大学学術出版会, 京都. 6200 円+税.

著者は、福岡市において文化財行政に携わりつつ、木器研究を推進している研究者である。京都大学在学中より、各地の木製品を実見しつつ、発掘調査や使用実験に関わるなど、様々な経験を積み、研究の出発点として、博士論文を骨子としてまとめられたのが本書である。

本書の目的は、木材利用の地域的研究を通して、弥生時代における木材特有の経済構造を明らかにし、社会形成における役割を追究することにある。そのために、木工具やそれらを使用する際の動作と資料に残された痕跡から木工技術を理解すること、完成品と未成品を統合した木器の型式変化から編年を構築することの2つの方法論を柱とし、それらに基づき、実証的な木器生産論の構築を目指している。分析対象は、主に近畿地方の資料である。

本書は、木工技術論に重点が置かれ、第Ⅰ部では、まず、加工痕とその生成に使われた道具やその使われ方、作業姿勢などが、実験に基づく経験によって検討されている。その後、木工具の柄と刃先それぞれの分類を行い、機能差を追究したうえで、柄と刃先との組み合わせや製作工程との紐づけ、鉄器化の様相について述べられている。

それらの結果をもとに、加工痕の集積である加工面の観察から、加工面の形成過程と使用された木工具とを整理するとともに、作業整序の復元方法を提示している。それをふまえて、製材技術の検討を行い、その変遷が資源の消費量や労働力の節約と関連していることを指摘している。

第Ⅱ部では、広楸、泥除、刳物容器、食事具を取り上げ、それらの型式学的な検討と製作工程など生産についての検討が行われている。形の変化には、機能や用途の変化のほか、作業の合理化、素材確保の問題などがあることが指摘されている。

第Ⅲ部では、木材の獲得から生産にいたる木工体制について、集落動態、植生環境、木工関連遺物の出土状況から、弥生時代前期から後期までの変遷を追究している。

終章では、これまでの議論を総括し、木材を軸にした弥生時代像を描くとともに、残された課題についても言及されている。

ここまで、本書の内容について、簡単に紹介した。ここからは、評者の研究の観点から、気になった点を述べておく。

第Ⅰ部、第Ⅱ部で述べられている、加工痕跡や加工動作、各器種の型式学的検討については、資料の丁寧な観察に基づくものであり、概ね同意できるものである。

ただ、型式学的な検討が主であるために、樹種や木取りについては、代表的なものは言及されているものの、巻末の一覧表に示すに留まっている。地域や時期により、利用

樹種の変化する泥除や刳物容器、食事具については、樹種、木取りと加工技術（木工具の変化や使用石材など）との関連が予想される。「樹種や木材特性、乾燥状態などが木材加工や木工具に対する作用に強く影響する」と述べられていることから、地域ごとの樹種組成も示したうえで検討することで、樹種と木工具との関係についても示唆が得られたのではと思われる。

ただし、現状では樹種同定が行われる資料には限りがあるため、著者の責任の範疇外の部分もある。樹種同定の重要性については著者も指摘していることであるが、樹種が明確な資料を増やしていくことは、今後の課題といえよう。

植生史研究と関わる部分としては、第Ⅲ部の一部において、周辺の植生環境とその利用について言及されている。木材資源は気候や地理的要因によって偏りや変化が生まれることから、その格差を均衡化するための仕組みとして、木材の供給体制について類型化を行っている。

ただ、現状では、遺跡の立地、木器の出土状況と木工具組成からの検討にとどまっており、木材資源の偏在性については、具体的に突き詰められているわけではない。

今後、議論を深めるためには、遺跡ごとに、特定器種だけでなく、出土した木質遺物全体を対象に、利用可能な木材の樹種とサイズを復元する必要がある。そのためには、すでに研究事例のある年輪数の計測や利用木材の直径復元を行っていくことが求められる。

また、実験や資料の観察に基づいて論が展開される第Ⅰ部、第Ⅱ部に比べて、第Ⅲ部では先行研究の援用が多い。著者自身の分析データの提示が少なく、やや点的な資料の取り上げ方になっているため、概略的な記述にとどまり、第Ⅰ部、Ⅱ部の成果が十分に活かされていないように思われる。第Ⅲ部は実証的な木器生産論を展開している部分であり、著者自身の個別の分析成果に基づいた論からの組み立てが望ましい。そのためには、少し地域を絞って集落動向や遺構の状況、木器や樹種組成、木工具組成などの変化を詳細に確認していく作業が必要ではないかと思われる。

本書では、分析対象を近畿地方に限定しているが、近畿地方の中でも利用木材には地域差がみとめられる。そのため、よりミクロな視点と西日本や東日本の各地と比較するマクロな視点からも検討が必要である。

このように、まだ議論に粗さがみられる部分もある。本書は著者の研究の出発点となるものであり、ここからさらに議論を深めていくためのものである。まずは、今後の研究フィールドとなる北部九州地域との比較研究の成果を期待しつつ、本書の一読をお勧めしたい。（中原 計）